光藤俊夫会長を偲んで

日本アーキテクチュラル・レンダラーズ協会（JARA）の発足時より会長職を務めていただきました、光藤俊夫氏が昨年 12 月 4 日に他界されました。ほぼ 38 年の永きに渡り会の為に尽力くださり、多くの会員への道しるべを示してくださったことに、心から感謝申し上げたいと思います。1980 年 7 月の設立総会にオブザーバーとして出席させていただいた私ではありますが、当時から設立 7 年近くを経るまでのことはあまりよく存じておりません。ここでは、JARA 設立時に初代理事長を務めていただきました福永文昭氏、前理事長の坂井田優実氏に設立当時の思い出、光藤会長への想いをご寄稿いただきました。

JARA 理事長：宮崎岳彦

光藤会長
（1990 年 10 周年記念事業にて）

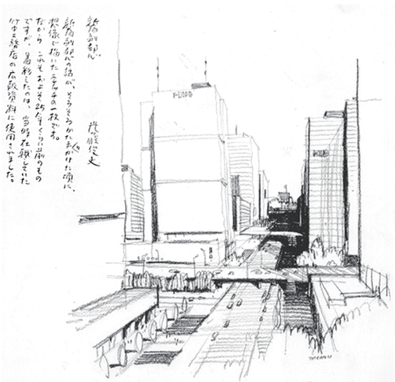
光藤会長（1981 年第 2 回 JARA 総会にて）

光藤俊夫

1930 年 大阪に生まれる。
1950 年 大阪工業大学専門学院建築学科卒業。
1953 年 京都市立美術大学美術学部西洋画科卒業。
　　同年、竹中工務店に入社。
1986 年 同社退社。光藤建築研究室。昭和女子大学大学院教授。
2005 年 同大学院名誉教授。
2017 年１２月 帰天 洗礼名 アントニオ光藤俊夫

著書

椅子劇場―家具未来形
明治・大正建築覚え書
椅子の世界
デザイナーのための家相読本
デザイナーのためのプレゼンテーションテクニック
インテリア演出論
インテリア構成術
住宅の家具 (建築技術選書 21)
絵とき日本人の住まい　　他多数



光藤会長スケッチ 「新宿副都心」

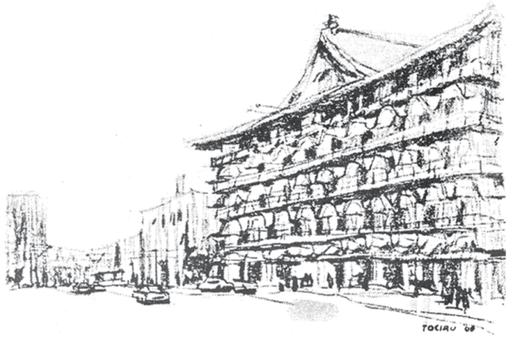
福永文昭

JARA 初代理事長
元日建設計東京事務所パース担当
フクナガレンダリング主宰

私が日建設計東京に入社したころは、東京タワーの設計で毎日鉄骨の図面ばかり画かされていた時でした。構造図の鉄骨を見るのが嫌で、上司に「パースを描きたい」と言ったところ即 OK が出て、その日からパース屋となりました。レンダラーズ協会が発足をしたころの話しです。当時パースを描く名人と言われる人は、竹中工務店の光藤俊夫さんと、清水建設の高須賀晋さんくらいなもので、建築設計事務所にはパースの上手い人はほとんどいませんでした。その頃高須賀さんがパース専門の事務所 TANA(後に「ドーム」と名称変更) を設立し、日建設計大阪から刈谷拓爾氏が入社、私も慌てて入社させてもらいました。当時のパースの制作の価格は初任給が相場と言う時代でした。出版社グラフィック社のバックアップで設立した、レンダラーズ協会がよちよち歩きで歩み始めたころです。

銀座の小松ストアやテアトル東京（映画館）のパースで、名を轟かせていた光藤氏にレンダラーズ協会会長として就いていただくことに決まり、協会事務局の小西氏と共に竹中工務店東京を訪ねましたが、当初は光藤氏のパースの副業に繋がるとのことで、許可が得られず苦労しました。その後、話は進展しましたが、今にして思えば光藤さんに会長になっていただき、本当に良かったと思います。ありがとうございました。お疲れ様でした。

福永文昭



光藤会長スケッチ 「大阪歌舞伎座」

坂井田優実

JARA 前理事長
エルファ・アーキィテクト

光藤会長と坂井田氏
（2012 年作品展会場にて）

在りし日の面影を偲びて

光藤俊夫会長におかれましては、１９８０年の創設期より２０１７年１２月までのおよそ３８年の長きにわたり、協会のため多大なご貢献をいただきました。ここに心からの感謝と尊敬の念を以って謝意を表する次第です。光藤会長 (以下「会長」と記) は、竹中工務店設計部にて設計の傍ら、パースの先駆的な存在としても高名な方でありました。縁あってＪＡＲＡ会長としてお招きしたことで会員の士気が高まり、延いては我が国のパースのクオリティが世界トップレベルとなりましたことは周知のとおりです。

私は１９８３年に入会し翌期のイベントで初めてお目に掛ったように記憶しております。当時、竹中工務店の大きなプロジェクトを率いておられた会長は、若々しくも威風堂々として近寄り難い印象でしたが、一旦ご登壇なされば誰をも魅了してしまうお話とユーモアのセンスには感銘を受けました。

協会は、会長夫人の故光藤タカ子様 (園芸家･著書にグリーンインテリア LESSON、育てて食べるハーブ、他) にも一方ならぬご尽力を賜りました。夫人は献身的で慈愛に満ちたお人柄で、感謝に堪えない思い出が幾つもございます。更にはご令嬢の村岡マリ様におかれましても貴重なお時間を割き、数多くのレセプション等には会長にご同伴下さいましたこと厚くお礼申し上げます。

２５周年記念事業ＪＡＲＡ大賞『文化財建築を描く』、３０周年記念事業ＪＡＲＡ大賞『美術館･博物館建築を描く』では、協会の顧問的存在である半澤重信先生 (建築家・元文化庁文化財保護部主任文化財調査官) とともに、日本を代表する著名建築家の皆様方を招聘しコンペティションの審査員を無償で引き受けていただくなど、会長と半澤先生の信用なしにはあり得ない事業を実現させていただきました。

また半澤先生ご監修のもと、文化庁後援名義・門外不出の文化財設計図書の借用 (但し「使用目的及び期日厳守」) を受けられたことは協会の大きな誇りです。

総会、イベント、海外交流と、思い出は尽きません。会長は常に会員の皆に暖かく接してくださいました。女性初の理事長就任とのことで励ましのお便りをいただいたときには勿体なさのあまり涙したことも。

在りし日の面影・・

会長が夫人を伴っておられる時はいつも、それはそれは晴れやかな笑顔でした。今、きっと御夫妻で天国から仲睦まじく協会を見守っていて下さると思うと幸せな気持ちになります。

ＪＡＲＡはこれからも世代を担う若い仲間を迎え入れ、皆で力を合わせて歴史を紡いでまいります。

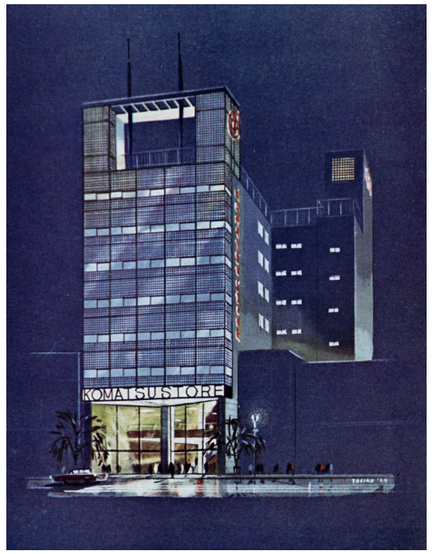
会長、ご家族の皆様、ご恩はいつまでも忘れません。本当に本当に有難うございました。

坂井田優実

最後に、JARA 発足 2 年目の 1981 年に開催された作品展『PERSPECTIVE’ 81』開催時に、光藤会長が寄せた文の抜粋を載せさせていただきます。

「建築の心」の展開

・・・・パースペクティブは、このような展覧会のためにあるものではありません。その本来の目的はあくまで建築主との間での、円滑なコミュニケーションの中にあります。しかし、それはやがて誰もが享受し得る社会環境形成の上で、多くの人たちの認識と共感の上に立つものとならなければなりません。その意味では､時にそれらの作品が、そしてその作品の内奥ひそむもの、すなわち「建築の心」を広く紹介する、そんな新しい機会の誕生を喜ばないわけにはゆきません。



光藤会長パース作品
銀座・小松ストア（1956）
「透視図のテクニック」（彰国社　1959 年　高田秀三・西川驍・金春国雄　編著）より

協会名称について

設立時（1980 年）の名称は現在と同じく「日本アーキテクチュラル・レンダラーズ協会」として発足しましたが、英語表記として「Architectural Renderers」としており、略称として「AR 協会」、「A&R 協会」などと呼んでいました。

翌年１９８１年、協会正式ロゴマークが作られ、その際英語表記を「Japan Architectural Renderers Association」と正式に決定されました。以降協会略称を「JARA」と呼ぶようになりました。